

20 華岡青洲自筆萬病一毒之説

高橋 均

現在まで、華岡青洲自筆の医学書とされてきた書物は、天理図書館所蔵の乳巖治験録のみである。今回取り上げた万病一毒之説という書物は、札幌華岡本家所蔵の春林軒家塾本の中から、故宗田一先生が新発見されたもので、天理図書館所蔵本以外では初の華岡青洲自筆本である。その発見は朝日新聞の全国版にて大きく取り上げられたものの、その内容は解説されないまま経過してきている。本学会ではその文意を解説し、解説を加えたい。

世人以一毒見一箇之事爲 人身所固有之毒愚按此 説
誤也一毒之一總一之一而 飛一箇之一其例如左説文 説
文曰初大始道立於一造分 天地化成萬物大學自天 子以
至於庶人壹是皆以脩 身爲本史記禮書總一 海内前漢書
描霍光傳作 總壹又一二三作壹貳參 又梵書有萬法一心

之語是 亦一對於萬總一之一也今 不暇枚舉其他押可知
萬病一毒之説の書き下し文は後記のごとくなる。世人
は、一毒を以て一箇の事と見、人身の固有する所の毒な
りと爲す。愚、按ずるに、此の説は誤れるなり。「一毒」
の「一」は「總一の一」にして、而して「一箇の一」に
あらず。其の例は左の如し。「説文」に曰く「初め大始に、
道に一に立ち、天地を造文し、萬物を化成す」と。「大學」
に、「天子より以て庶人に至るまで、壹にこれ、皆、脩身
を以て本と爲す」と、「史記」禮書「海内を總一す」と。
「前漢書」霍光傳には「總壹」に作る。又た「一二三」
は「壹貳參」に作る。又た、梵書に「萬法一心」の語あ
り。これまた「一」を「萬」に對し、「總一の一」なり。
今、枚舉に暇あらず。其の他は押して知るべし。

現在語訳では、世の人々は、「一毒」なる概念を、一箇
の事象と見なし、それをば人の身体に固有する毒である
と見なしている。私どもが考えるに、この説は誤ってい
るようである。「一毒」の「一」は「總一の一」であ
って、「一箇」の「一」ではない。その用例は以下のとお
りである。「説文」に、「初めの大始に、道は一に立ち、

天地を造分し、萬物を化成す」とあり、「大學」に「天子より以て庶人に至るまで、壹にこれ、皆、脩身を以て本と爲す」とあり、「史記」禮書に「海内を總一す」とあり、「前漢書」霍光傳には「總壹」に作っている。また「一二三」は「壹貳參」に作る。また、梵書には、「萬法一心」の語がある。これもまた「一」を「萬」の対にしており、「總一」の「一」である。今、枚挙に暇ない。其の他は推して知るべし。

華岡青洲は、吉益東洞の子息、吉益南涯の弟子にあたる。「萬病一毒之説」は、華岡青洲自筆本であり、門人が吉益東洞の提唱した「萬病一毒論」の解説を求めてきたため、自分自身で古典文学の文章を引用し解説したものである。本書物を解説することにより、華岡青洲が儒学に深く通じていたことがわかる。本文中でも「説文」、「大學」、「史記」禮書、「漢書」霍光傳中の文章を引用して解説している。そのみならず、梵書「大乘記信論」さえも引用し解説している。

これらのことから、華岡青洲は、江戸時代中期の医学者として、極めて教養人であり、医学のみならず、儒学

や仏典にまでも通じており、その知識の深さに感心させられる。本年「萬病一毒之説」以外の華岡青洲自筆本が発見された。次の学会では、この「丸散便覧序」についている序文につき報告したい。最後に、本資料をご提供いただいた札幌華岡青洲博士に深謝いたします。

(近畿大学医学部附属病院救命救急センター)